

藤原良経の本歌取試論

— 型の分類の試み —

平成八年度学部卒業 君 嶋 亜 紀

本発表では、新古今歌人・藤原良経の本歌取を対象とし、本歌取という表現技法について、その読みの一視点の提示を試みた。

「本歌取」とは一般に、「古歌の語句を取り入れることによって一首のうちに重層的な世界を生み出す手法」と言えるかと思うが、ではその具体相はどのようなものなのか。体系的に説明できないだろうか。また本歌取といえば、定家の歌論がまず想起され前提とされているが、歌論は一先ず措き、個々の実作に虚心に向き合うところから何かを見出せないだろうか。以上のような観点から、享受者として本歌取の作品はどう読めるのかということに焦点を当てて、本歌取の型の分類を試みた。

考察対象としたのは、良経の私家集『秋篠月清集』前半部定教歌中の本歌取歌四百首余りで、本歌取の認定は、本誌第二三号に「藤原良経の本歌取りについて」を発表された伊東成師氏の御調査の結果を拝借した。なお本歌の定義は便宜上、詠歌に何らかの形で影響を与え撰取されているものとした。方法としては、本歌と良経歌との関わり方、即ち本歌に対する態度や、本歌の存在によってもたらされている表現効果という面に焦点を当てて、一首一首解釈して見た。その結果、管見によって抽出し得た本歌取の型を次に示すと、

I 語句（秀句）撰取、構成の襲用、発想を学ぶ、など

II A 構造的な本歌取

B 展開型本歌取

1 景の時間的展開

2 景の絵巻物的展開、二重映像化

3 状況（人事）の進展、極限化

C 唱和型本歌取

1 贈答型唱和

2 思いやり型唱和

3 切り返し型唱和

D 情報源の提供、予備知識の付加、解釈補助

E 対比・対照性

F 歌枕の用法・気分醸成

となる。紙数の都合上ここでは省略するが、発表では各項目毎に一首ずつ例示して解釈した。命名は暫定的なものだが、現時点では考察対象の九割方を以上のような方向で解釈し分類し得た（但し半数近くがIだった）。これは飽くまで私の解釈に拠って得た結果なので非客観的という批判を免れないかもしれないが、本歌取とは享受者の側の解釈の問題であるともいえる。ならばその解釈に、このような型を基準として立ててみてよいのではないだろうか。

また最後に分類結果の統計を、良経歌の典拠となった定教歌別と本歌の典拠資料別に各々表示した。そのようにして得た全体像から視点を良経の側に転じると、良経の主情性、時間意識、秀句志向などが、その歌風の特徴として挙げられるのではないかと予感している。今後の課題として、先の分類結果の蓋然性を他歌人の本歌取の考察によって確認していくとともに、本歌取の仕方を通じた良経の歌風の考察も進めていきたいと思っている。